

風穴特集 特別企画

当時の写真

明治・大正時代に小諸の養蚕業を発展させた「氷風穴同益社」。

— 写真提供 —
前田 正孝氏

風穴の魅力を語る

小諸市長 × 荒木貴志 × 前田富孝

今、氷風穴に着目し、地域のために行動を活発に行う者たちがいる。風穴が持つ価値や魅力が、人と人をつなぎ合わせたことで、それまで不可能に感じていたことも可能にしてしまう。市長との対談を通じて、2人の本音に迫り風穴の魅力を語っていただいた。

私にとって風穴とは、
人との出会いを
つくってくれたモノ。

荒木 貴志

Araki Takashi

43歳。(一社)長野県建築士会青年女性委員会佐久支部に所属。6月に開催された青年建築士協議会関東甲信越ブロックで風穴をテーマに発表し、最優秀賞を受賞。(現在、全国大会2連覇中)風穴の価値を知り、消滅の危機を感じ、氷区の皆さんに風穴保存会の結成を呼びかけ、地域活性化を推進している。現在、12月に開催される青年建築士協議会全国大会で3連覇をめざしている。

私にとって風穴とは、
小さい頃からの心のふるさと。

前田 富孝

Maeda Tomitaka

65歳。氷風穴の里保存会会長を務める。小さい頃から風穴に触れて生活してきた。最近では氷区長を務めていたほかに花卉栽培農家でもある。菊を栽培し、出荷調整のために風穴を利用している。建築士会の皆さんの声掛けにより改めて風穴の価値に気づき、今後も風穴を保存していくために保存会の会長として立ち上がった。風穴のあり方について、保存会会員をまとめながら模索している。